

適切に おおらかに 曖昧に

オットー・デザイン設立 10 年をむかえて

1. ランドスケープの再定義へ

以前から、「ランドスケープデザインの再定義」をしたいと思っている。ランドスケープを外の世界から長らく見ていて、今はランドスケープの内側に関わるようになって確信しているが、ランドスケープには本当に多くの魅力とポテンシャルがある。気候変動や人口減少といった地球・国レベルの話から、人々の自然環境や生活環境への注目度の高まり、“豊かさ”への希求など個人レベルの話まで、ランドスケープが求められる社会的な背景はたくさんある。日本という国のことだけをいえば、人口減少社会のなかで地方都市が置かれている状況は非常に厳しい。税収が減り、財政状況が悪化する一方の行政ができることは多くなく、いかに知恵を絞って効果的な投資をするかが大袈裟ではなく自治体の将来に直結するレベルまでできていると実感している。そんな時代だからこそランドスケープの持つ能力が活きるのではないかと、ここ数年思うようになった。

ランドスケープデザインは、“鳥の目 虫の目”といわれるように、特定の敷地内に収まるものではなく、常に周囲との関係の中で生み出される。この視点を通したものづくりができれば、何かしら新たな価値を生み出し、地球環境や社会へも貢献できると思う。それは設計行為に基づくものだけではなく、対話を通じた創造的な活動においても同じはなしだ。この新たな価値を生み出すことを、改めて「ランドスケープデザイン」と呼びたい。まだ明確に言語化するまではできないが、次の 10 年は、いよいよ「ランドスケープの再定義」に取り組んでいきたいと思う。

2. 人がその場でどう生きるか

自分の仕事は、単に外構を設計しているのではなく、人と場の関係性の変化を設計している、という感覚に近い。だから設計以外の事にも積極的に関わるし、それが不可欠だと思っている。でもやみくもにやるのも効果がないので、しっかりと方向性を持って動いていくことが大事で、関係者間で共通認識を持つことはもっと大切なことだ。

私たちが、その場に関わることができるのはほんのわずかな時間でしかなく、関わりがなくなると私たちが会ったこともない人たちの場所になっていく。そのときのために私たちが何を残せるのか。そう考えると、いかに多くの人の心の中に残るものをつくることができるのか、ということが大事だということに気づいていく。私たちは単に場をデザインしているのではなく、人と場が関わる入口を作っているのだ。

3. “良いデザイン”とは何か

それは人に使われること、そこに人が居ること、人の心の中にある、あるいは自分の場所だと想っている人がいる、ということだと思っている。

では、“良いデザイン”をつくるには何が必要なのだろうか。改めて考えてみると3つに収斂される。3つに分けてはいるけど、それぞれが独立しているわけではなく、繋がりが、連続している。

1) 空間の魅力

誰かの心を動かす風景がそこにあるか。1人でも落ち着ける、何度でも来たいと思える力を持っているか。

地域に根差しつつも新たなフェーズを感じさせる、ワクワクする場づくりができているか。

多くの人の声を聞いたとしても、最終的につくっていくことの責任は負わなければいけない。

2) 持続的に成長する環境

いつ訪れても良い状態にあるか。適正な配置ができているか。土壌や水環境などの自然環境や人々との関係などの社会環境など、見えづらいところのフォローができていて成長できる状況になっているか。

3) 誰かの“自分事”になっている

結局その場に関わり続けていくのは周りの人たち。周りの人達の目が、場やまちに向き続けていくようになっているか。人が関わりつづける余白があるか。これは全てのケースにおいて、また全員において求められるものではないが、とても大事なこと。

4. 私たちの設計手法

私たちの仕事は大きく分けて2つある。ランドスケープデザインを行う設計者として関わる場合と、図面を描かないまちづくり支援を行う場合に分けられる。そしてここ数年は、この2つを融合した取組みを増やしていきたいと思っている。つまり、ランドスケープデザインの仕事なのだが、まちづくりの視点を持って使い手側の声を徹底的に聞いて、それを設計にフィードバックしていく、また完成後の活動に繋げていくというものだ。それは単にワークショップで出された意見を設計に反映していく、ということではなく、設計プロセスがすでにその後の利用の一部であるという認識のもとに進めるプロセスだといえる。

そのためには、良い空間デザインをするのは当たり前で、さらにそこにプロセスデザインを組み込んでいくことを考えることが必要となる。大いに手間のかかる話だが、この手間が私たちが関わらない時間に効いてくると思っている。ここに改めて私たちの設計手法というものを整理しておこう。

1) 場の読み解き

自然的資源（気候・地形・植生・地質など）と社会的資源（歴史・都市構造・土地利用など）の読み解きを広域・中域・狭域のスケール別に徹底的に調べる。対象地・対象エリアの背景を丁寧に読み解くことで、やるべきことが明確に見えてくる。

2) とにかくスタディ

新しいものをつくるには試行錯誤が不可欠。空間のバランス、ディテール、素材、コスト調整などなど、あらゆる可能性の中からベストの選択肢を探していく。これでの積み重ねを踏まえつつ、常に新しいものに挑戦していく。当たり前といえば当たりの話。

3) 想いをカタチにする

多様な利害関係者の声を聞き、それを言語化、視覚化していく。空間のデザインは最後は自分が責任を持たなければいけないが、決して自分だけのものではない。声を聞いてつくられたデザインには簡単には折れない強度が伴う。

4) プロセスのデザイン

場をつくる過程で人々との接点をいかに多く生み出せるか。声を聞くことは手間も増えるし自分たちが汗をかかないといけないが、デザインに反映すること、つくられた後の持続的な運営にもつながるなど、様々な利点がある。プロジェクトの初期段階で、このプロセスデザインをしておくことが重要。

5) 仕組みのデザイン

場の環境が持続的なものになるには管理運営の仕組みが必要になる。カタチをつくることと同じくらい仕組みをつくることは大事。樹木を小さく植えて大きく育てる、と言うのは簡単だけど大きく育てるには人の手と目が必要。しっかりとした組織ではなくともプラットフォームがあれば機能する場合もある。多くの場合は、スモールスタートで小さなゴールを積み重ねていくことでスムーズに物事が動き出していく。

5. 挑戦と試行錯誤の10年

2016年7月に独立するまでは、駅前広場や公園、道路の設計、宅地造成、ワークショップなどを通じたまちづくり支援、街並みガイドライン、都市計画制度検討などの担当業務が多く、いわゆるランドスケープデザインに関わることは少なかった。独立した日に手元にあった仕事は1つだけ。後輩から声をかけてもらった、こども園のランドスケープデザインだった。公共デザインとは違う自由度に喜びを感じ、何十枚も図面を描いたのだがコスト感が理解できていなくて、ほとんどのデザインが幻となった。それからは挑戦と試行錯誤の連続。上手くいったこともあるが上手くいかなかった事の方が多いように感じる。いかに失敗を予知できるか、いかに成功を想

像できるか、曖昧なところがないか、それがプロジェクトの成否を分けることがようやく少し分かってきた。

独立したときに自分にしかない強みは何かを考えていた。ランドスケープの仕事をやっていきたいという思いはあったけど、何か実績があるわけではないので強みになてならない。公共設計とワークショップなどによるまちづくり支援はやっていたので、都市計画的なレベルから土木設計まで横断的に扱えることが自分の強みだとは思っていた。でも独立直後の 2 人だけの会社にそんな話がくるわけなし、公共の仕事の実績がないのでプロポーザルのエントリーすらできない。厳しい現実を実感しつつ、与えられたプロジェクトと丁寧に向き合いながら、自分にしかできないランドスケープを模索してきた。少しずつ実績と経験を重ね、ようやく見えてきたランドスケープの奥深さに今ではすっかり魅了されている。適切に、おおらかに、曖昧に。それがランドスケープだと思うようになった。同時に、次の 10 年に向けて自分に何ができるか考えるようになった。

6. 次の 10 年に向けて

ランドスケープデザインという言葉が専門家の間で使われだして 30 年ほど経ち、今では一般の人でもランドスケープデザインという言葉の口にするになった。先人たちの功績のおかげで僕らの世代は仕事があることを忘れていけないし、この流れをさらに大きなものにしていかなければいけない。

一方でランドスケープに関わる人たちは、自分たちのことを少し過小評価しているところがあるのではないだろうか。そんな思いすらある。もっと自分たちが活躍できる場をアピールしてもよいのではないだろうか。

ランドスケープデザインを一般化していくことも大事だが、同時にランドスケープデザインの質を上げていくためには互いに切磋琢磨して競い合い、時には激しく議論する場があっても良いのではないかと思う。それが強度を高め、認識を強めていくのだと思う。多くの人に場外乱闘を見てもらい、ランドスケープデザインの強度を認識してもらい、そんな場があっても良いのではないかと思う。JLAU というプラットフォームが、この数年でそんな場になれば良いと思っている。

事務所の仕事としては、ようやく見えてきた細い糸口を太い縄のようにしてく段階だと思っている。今の設計手法を基に空間デザインとまちづくりの融合を図り、それが地域再生に貢献できると信じているし、それを証明するための 10 年にしていきたい。

2026 年 7 月

大木 一